



奈良 薫は明治二十一年旧大原村（現猿橋町）猿橋三十三番地に生まれた。奈良家は古から、猿橋の商家であったが、薫の父は七保村林九六六（現田無瀬）の屋号油屋小俣家から奈良屋に入婿した。小俣家は絹屋とも糸染め屋とも言われているが、現在廃家となり子孫が絶えているので詳しいことは不明である。

奈良家も絹商を営んでいた関係で小俣家との縁があったものと思われる。薫は幼少時より自然が好きで植物の採集をする、花に親しむ少年であったため、性格も温和で大人しい少年であった。薫は大原小学校を卒ると、明治三十六年四月一日、県立山梨県第二中学校都留分校（日川分校）が広里村（現大月）に開設されると同校に進学した。同級生には、駒橋出身の小

宮悦造博士・花咲出身の井上一光さんなどがいた。日川分校は三年生までで、四年生からは日川本校に通学することになっていた。交通の便のない当時は、日川本校に通学するには、寄宿舎に入るか、東京方面の他の学校に進学するしかなく、薫も日川本校に行かず他の学校に進学したようである。（日川中学校の同窓会卒業名簿には載っていない）

その後、薫は、小学校の教師（代用教員）となり、猿橋尋常小学校で教鞭をとり師弟教育に長い間専念している。母校大原小学校は明治二十六年五月、猿橋・小沢・藤崎の各尋常小学校に独立、同四十一年四月二日高等科を併置、猿橋高等尋常小学校となっている。（「心に舞う「温故」山口善久著」）

薫は、少年時代から普通の少年とは異なり、身格好もなよなよとしていて女がたで、茶道や活花に興味を持ち、教師の時代から茶道、華道に精進した。

これも猿橋は、北都留地区の中心地で、文化性の高い環境や、商家が多く、生活に余裕があり、稽古事が盛んで、華道・茶道に親しむ機会に恵まれていたものと思われる。

近隣の薫を知る人は、近所の商家の主人達が挙って「遠州流の華道」を、薫から教わったという話も聞かれ、薫も猿橋小学校の教員時代に誰かに師事し、華道茶道に精進、師範となったようである。

薫の流儀は、花は、「池の坊」茶道は「裏千家今日庵」で、師範の免許を得て、界隈では並ぶ者の無い茶人としてその名を遺している。また、当時はこの辺には花屋が無く、薫は近所の教え子などに声を掛け、野山を散策しては、活花の教材を収集、弟子達の稽古に活用したとのことで、華道普及のため、並み並みならぬ苦勞と、情熱があったと伺われる。小学校の教師を辞めてからは、県立都留高女が大正十二年開校され郡内一円遠くは東山梨・神奈川県津久

井郡の才媛が都留高女に進学。

時の人、中山校長は、特に「良妻賢母」の育成道場として、婦道教育に力を入れ、正規の教科にはない、華道・茶道を情操教育の必須科目とし、薫を招聘、薫は、この課外授業で、女学生に茶道、華道の、侘びさびの精神の体得、日本古来の文化の高揚に貢献した。

その結果、今日の郡内の華人、茶人の多くは、都留高女、都留高校の薫の門人で、富士北麓一帯の伝統文化の担い手として各地域の文化祭・イベントでの茶席、華道展のリーダーとして活躍している。

薫は、猿橋小学校の教師の時、結婚、妻女は七保村葛野の人である。子供は、長男仁の外、女子に恵まれ成人して他家に嫁いでいるが、長男仁は、薫の後継者として、旧制都留中学校を卒え、山梨師範二部に進み、その後教師となり、大東亜戦争に従軍、陸軍大尉で復員北都留地区の教員となり、校長職を定年退職後は、薫の後を継ぎ、茶道華道の師

匠として、薫の門人の稽古に精進した。

薫の生い立ち、茶道華道への精進の歩みについては、現在、奈良家の子孫の方がお孫さんで、ふるいことについては解らず、また近所の古老の方も亡くなり、詳しく記述することが困難である。

茶人としての薫は茶名を宗薫といていた。宗薫についての想い出、印象、郡内地区での茶華道の活動については、門人の方、都留高女の卒業生の話が大変興味深いのでこれを紹介することとする。

◆「何時も和服姿でちょっとなで肩、小造りの先生の面影が何時までも忘れられない。」
高二 I女
◆「都留高女での奈良先生は、活花の課外授業で教わりましたが、とても柔和で親しみ易い先生でした。」
高女 O女

しんでいる。女学校時代習った頃をなつかしく想い出している」
高女 S女

宗薫は昭和二十三年から富士吉田下吉田の内田宅で茶華道の指導を始め、その後、二十四年から白須規矩治宅に稽古場を移し、以来昭和五十三年（逝去の二か月前）までの三十年間指導を続けていた。彼は月江寺駅から約一キロの道を歩いて白須宅まで来て午前中華道、午後は茶道の指導をしていた。

その間昭和二十八年から富士吉田市文化祭に岳静会として茶会に参加し五十二年まで続けた。その後、内弟子に引きつぎ現代まで続けられている。そのほか彼は谷村禾生地方に行っても指導して南北両郡の広い範囲にわたって今日の茶華道の発展に貢献し昭和五十三年二月十一日死去、九十歳の高齢であった。

執筆者 井上文次郎
協力者 仁科義民